

## 研究ノート

## 食の哲学と倫理のための予備的考察

宮 嶋 俊 一

## はじめに

人間にとっての食の重要性は、あらためて言うまでもないだろう。ところが食をめぐるのは、とりわけ2000年代以降、数多くの問題が発生してきた。例えば2000年代の初頭にはBSE（牛海綿状脳症）問題が発生したが、この出来事は畜産業（食肉産業）、外食産業、さらに一般生活者を巻き込む形で、一種の社会現象とも呼ぶべき事態を生んだ<sup>1</sup>。

また2000年代には食品偽装問題が頻発した。そのいくつかを挙げると、産地偽装問題としては01年に雪印牛乳偽装事件が、また03年には飛騨牛偽装事件が発生した。原材料偽装事件としては、07年にミートホープによる豚肉・鶏肉等の混入挽肉販売事件が起こった。消費期限・賞味期限偽装事件としては、07年には赤福による「赤福餅」の消費期限偽装事件が、また石屋製菓によるチョコレート「白い恋人」の賞味期限偽装事件が発生した。食用の適否の偽装としては、三笠フーズ（大阪市）・浅井（名古屋市）・太田産業（愛知県小坂井町）による事故米の食用偽装転売が問題となった。さらに07年に起こった、船場吉兆による食べ残しの再提供もここに加えることもできるだろう。

こうした事件に対して、企業倫理の観点から様々な批判が起こったが、そうした批判だけでは不十分である。なぜなら、こうした問題の背後には食の「モノ化」というより根源的な問題が存在しているからである。食べ「モノ」という表現が示しているとおり、食材・食品がモノであることは確かである。モノである以上、私

たち人間がそれを自分たちの都合に合わせて取り扱うことができるし、またそれは当然のことでもある。だが、食べ「モノ」はやはり、工業製品とは異なっている。それは、食という営みにおいて、食べ「モノ」が私たち人間そのものになるという点においてである。本稿ではそのことの意味を考察していきたい。

もうひとつ、食の問題に関して、食品の放射能汚染の問題が存在している。2011年3月に起こった福島第一原子力発電所の事故に伴う放射能汚染の拡大は、食品の放射能汚染に対する危機感を高めると共に、いわゆる「風評被害」をもたらしめている。生産者、消費者、それぞれの立場から、私たちは大変に困難な状況に直面していることに違いはないが、短い本稿でこの問題のための解決の指針を示すことは難しい。この出来事が私たちに突きつけているのは、人間も自然環境の一部、あるいは自然環境そのものであり、放射能汚染は内部被曝という形で、人体の内部環境の汚染を生じさせつつあるという事態ではないかと考えられる<sup>2</sup>。本稿では、そうした示唆につながるような検討をささやかながら試みたい。

## 食における主客の同一化―「動的平衡」論を参考に

まず、食とは何かについて確認することから始めたい。食とは一般的に、主体としての人間が、対象である食べ「モノ」を体内に摂取する行為として捉えられているのではないだろうか。確かに現象としてはその通りである。一般的な

食事の光景を思い浮かべてみても、それは明らかであろう。だが、そうした見方で食を理解するだけでは不十分である。なぜなら、食べる主体である人間の身体そのものが食べられた「モノ」(＝客体)によって作られているという側面もあるからだ。つまり、食(食べること)の本質とは主体と客体の同一化であり、福岡伸一が言う通り「汝とは、『汝の食べたもの』」である<sup>3</sup>。

では、そこで食べられる「モノ」とは何か。それは元来、人間以外の動植物、すなわち「いのち」なのである。つまり、食とは自分とは異なる「いのち」を奪い、それと一体化することによって、自らの「いのち」を持続させていく営みと言える。

このことは、とても大きな意味を持っている。なぜなら、食という営みを通じて、人間は環境の中に組み込まれていくことになるからである。これも一般的に、環境とは人間の外部に広がる世界であると考えられている。だが、「環境は生命を取り巻いているのではない。生命は環境の一部、あるいは環境そのもの」である<sup>4</sup>。よって、食という営みにより本来は人間が自然環境の一部であることをあらためて自覚させられるはずなのだ<sup>5</sup>。

しかしながら、対象と同一化するとは言え、人間が「豚人間」や「牛人間」や「鶏人間」になってしまうわけではない。では対象と一体化するとはどういうことであろうか。そのことについてさらに考える必要がある。私たちは、食において、自分(人間)以外の生物＝他者を体内に取り込むわけだが、そのために他者はその存在を一度「解体」されなければならない。その「解体」にはいくつかのプロセスが存在している。例えば牛であれば、まずそのいのちが奪われ、解体され、食肉として加工されていく。牛という生き物は牛「肉」という食べ「モノ」となるのである。食肉と化したそれは調理され、人間の口に運ばれる。だが、口の中に入れただけでは、同一化されたとは言えない。それは胃で消化され、分子へと解体され、その存在をこ

とごとく「解体」されてしまう。そうされることによって、私たちは自らの体内へ牛「肉」を吸収し、同一化していくのである。つまり食とは、食べ「モノ」として摂取したタンパク質が、身体のどこかに届けられ、そこで不足するタンパク質を補う、といった営みではない。タンパク質に限らず、食べ物が保持していた情報は、消化器官内でいったん完膚無きまでに解体されてしまう<sup>6</sup>。すなわち、食の対象である動植物は、「解体」、「切断」されることによってばらばらにされてしまうだけでなく、「消化」のプロセスにおいてさらにばらばらに分解され、元の姿を完全に失ってしまう。生物はその消化プロセスにおいて、タンパク質にせよ、炭水化物にせよ、有機高分子に含まれているはずの秩序をことごとく分解し、そこに含まれる情報を捨ててから吸収するのである。なぜなら、その秩序とは他の生物の情報であったものであり、自分自身にとってはノイズにすぎないからだ<sup>7</sup>。

ここで、シェーンハイマーに依拠しつつ福岡伸一が提起して有名になった「動的平衡」という生命観を確認しておこう。シェーンハイマーはネズミの組織のタンパク質を研究し、その体内に取り込まれたアミノ酸が細かく分断され、あらためて再分配され、各アミノ酸を構成していることを明らかにした。つまり、ネズミの身体において入れ替わっているのはアミノ酸よりもさらに下位の分子レベルであった。外から来たアミノ酸がネズミの身体の中をくまなく通り過ぎていった、いや通り過ぎるべき入れ物があると言うことではなく、その入れ物と思われた生物そのものが通り過ぎつつある物質によって一時的に形作られたものに過ぎないのであった。つまり、生命とは「流れ」に過ぎない<sup>8</sup>。「生命とは代謝の持続的变化であり、この変化こそが生命の真の姿である」<sup>9</sup>。

生命とは、あたかも海辺に立つ砂の城のようなものである。それは実体としてそこに存在するのではなく、流れが作り出す効果としてそこにある動的な何かであり、その何かとは平衡である。つまり「生命とは動的平衡にある流れ」

ということになる<sup>10</sup>。

本稿ではこの生命観に対して検討を加えることは行わないが、ここで確認しておきたいことは、生物学的に捉えていくなら、食において主体と客体という区分は存在しないということである。

私たちは、自己（＝主体）と他者（＝客体）の間に境界を引こうとする。その境界は観念的なものに過ぎないのだが、そうした観念的な境界を設けることによって、かろうじて自己を保持している<sup>11</sup>。哲学的な自己他者論では、このようにして「作られた」自己と他者の関わりが認識論的に分析される。それに対して、福岡の動的平衡論に基づく生命観では、存在論的な見方が示されていると言えるだろう。

## 見えなくなった食のプロセスと食の「モノ」化

ここまで、主客の同一化という観点から食のプロセスを確認してきた。だが、食におけるこうしたプロセス、すなわち個体として存在していた生物がいのちを奪われ、食べ「モノ」へと解体される、という過程を私たちはつい見過ごしてしまう。よく言われることであるが、私たちが食品として購入するのは、一頭の牛、一頭の豚ではなく、解体された食「肉」だからである。スーパーマーケットで販売されている牛「肉」の一片から、私たちは一頭の牛の姿を思い浮かべることはない、あるいはあつたとしても、その一頭の牛と店頭の食肉との間に存在する食肉加工のプロセスを想起することはない<sup>12</sup>。

だがモノ化のプロセスはそれに止まらない。私たちは、解体された食べ「モノ」をさらに「モノ」化して捉えるようになっていく。その一例が栄養価・栄養素へと還元していく見方である。私たちの関心は、どのような栄養素を摂取しているのか、またそこで摂取される栄養価がどれほどであるかに向けられていく。一片の食「肉」の中に、栄養価・栄養素を見出していくことで、私たちはそうした素材を、さらに「抽象」化しているのである。肉に限らず、食

をタンパク質や脂肪といった栄養素の摂取として捉え、またそれらのカロリー値に目を向けていく。それは食の数値化・抽象化と言ってもよいだろう。そのことを示す一例が、サプリメントの摂取である。ビタミンCやカルシウムが含まれる食品ではなく、ビタミンCやカルシウムのサプリメントを、すなわち栄養素を栄養素として摂取することが行われているのである。こうした傾向は、食の「モノ」化の中でも、とりわけ科学に基づく数値化として捉えられる。

食の数値化はもうひとつ生じている。それは、食品の価格への関心である。私たちが何か食品を購入する際、価格を判断材料にすることが多い。近年、その傾向に多少変化が見られるものの、これまでは食材の生産のプロセスや品質にあまり目を向けることなく、むしろ価格を選択基準とすることが多かった<sup>13</sup>。ミートホープ社による食肉偽装事件のとき、同社は豚肉を牛肉と偽り、風味から露見しないよう牛脂を加えるなどさまざまな工夫をしていたが、その背後には安い価格の食品を購入したいという消費者の欲望が存在していたことは確かである。

ここまで、食の「モノ」化の内実として、個体の「解体」に加え、栄養素・栄養価や価格への還元という問題を指摘した。これらはいずれも「数値化」であった。食が数値によって捉えられているのである。こうした見方と対比されるのは、文化的な視点であろう。何を食するのか、またどのように調理して食するか、それはそれぞれの地域、時代における食文化である。その中には、もちろん宗教的、民族的、地域的な食のタブーも含まれる。

食はカロリー値といった観点だけから捉えることはできない。極端な例が、カニバリズムのタブーである。私たち人間はカニバリズム（人肉食）をタブーとしてきた。その理由はいろいろな観点から説明できるが、生物学的に見るなら、その理由のひとつは「種の壁」を守ることにある。ヒトの病気はヒトにうつるが、ヒトを食べるということは食べられるヒトの体内にいた病原体をそっくり自分の体内に移動さ

せることである。だからヒトはヒトを食べてはいけない<sup>14</sup>。だが、このような生物学的根拠に加えて、私たちの生理的な嫌悪感の根底には、より観念的な問題が存在していると思われる。すなわち、食の対象との一体化という観点からも、その忌避の理由を考えることが出来る。既述の通り、私たちは観念として自己と他者の間に境界を引く。そして、食とは主体としての自己が客体としての他者のいのちを奪い、その客体を自己の内部に取り込み、同一化する行為であると捉えている。だからこそ、同種の人間を食の客体＝対象とすることに大きな抵抗を感じるのである<sup>15</sup>。

食を「文化」として捉えていく視点が重要なのは、それが動物と人間を分かちメルクマールともなるからである。動物にとって食とは栄養摂取の手段でしかない。「おいしく食べよう」といったことを動物は考えない。動物は、「食べる」のではなく「食う」のである<sup>16</sup>。

### 三つの方向性

以上、食をめぐる問題状況を論じてきたが、では食をめぐる問題に対して、どのような対応が考えられるであろうか。「食の哲学と倫理のための予備的考察」と題した本稿では、個別・具体的な対応策を論じることとはせず、むしろより大きな方向性を示すことを目指したい。

ここでは大きく3つの方向性について考えてみたい。いずれも、食べ物の「モノ」化を批判するための視点であるが、それを3つの角度から確認したいのである。それは、(1)「顔」を取り戻す、(2) 生命と環境との一体化、(3) 事的世界観から物的世界観への転換、という3点である。

まず、ひとつめの方向性、すなわち「顔」を取り戻すために<sup>17</sup>についてである。これまで述べてきた問題をまとめていくなら、食品から「顔」が失われてきたということになる。あらためて繰り返すと、食とは対象との一体化であり、対象の解体と吸収によってそれが人間の身

体へとたらされるプロセスであった。生物学的には、そこに主体と客体の区別は本来存在しない。だが、人間は食べ物の「モノ」化によって、いのちを自由に操作できる対象としていった。そこでは徐々に対象の持つ「顔」が失われていったのである。だが、動物を捕らえて、それを自分たちで解体し食するプリミティブな暮らしを想起すればわかるように、元々人間は「顔」を持った他者のいのちを奪うことで自らのいのちをつないできたのである。近代化した社会では、その他者性を感じさせない。食べ物はまさに「モノ」であり、抽象的・数値的な栄養素なのであった。

食べ物から「顔」が失われている。ここで言う「顔」とは個性の比喻であると同時にまた、「顔」そのものが失われているということでもある。例えば、私たちは、中華料理店の店先に並べられた豚の顔を見て、一瞬ぎょつとしてしまう。食事をする場にあるはずのない「顔」を見てしまうことには、やはり驚きがあるのだ。

もちろん、そうした普遍化に対する批判もまた起こっている。例えば、スローフード運動はそのひとつである。スローフード運動が地産地消を重視するのも、土地と結びついた食材の個性を取り戻す試みであるはずである。

スローフード運動に限らず、生産地（農場なども含めて）や生産者の顔が見える食材の流通・販売が盛んになっているのもやはり食べ「モノ」に「顔」を取り戻そうとする動きであろう<sup>17</sup>。

第2に、環境と生命の一体化という視点である。本稿では、シューマッハーに依拠した福岡伸一の動的平衡論を援用しつつ食の問題を考えてきたが、本稿で示したのは食を媒介とすることによって、生命と環境が一体化することになるという視点であった。人間という主体が環境を操作するのではなく、人間は環境の一部、あるいは環境そのものであるというのが福岡伸一の結論であった。そのことが現れているのが、まさに「食」であり、その視点を持つことが、食に対する倫理の基盤を形成しうるであろう。

放射能汚染による食品汚染の拡大は、私たち

にこの視点をもたらしてくれた。放射能汚染は、環境汚染であるが、それは生態系の汚染、食品の汚染となり、それを食した人間に対して内部被曝という形で汚染をもたらしてしまうのである。

最後に、食に対する見方の転換への示唆として、物的世界観から事的世界観への転換ということを挙げておきたい<sup>18</sup>。本稿では食べ「モノ」という表現によって、食の「モノ」化を批判的に考察してきた。だが、実は食にはもうひとつ、食「事」という表現が存在している。つまり、食をモノとしてではなく、コトとして捉えることができるのである。人間がモノをいかに操作するか、という視点から食を捉えるのではなく、食を出来「事」として捉えていく視点こそが今必要なのではないだろうか。

## 注

- <sup>1</sup> BSE問題を食の観点から考察した書籍として、福岡伸一『生命と食』岩波書店、2008年を挙げておく。本稿は福岡伸一の考察から大きな示唆を受けている。
- <sup>2</sup> 拙稿「ポスト「3・11」を生きる思想—原発震災から文明を捉え直す」『21世紀とトインビー』VOL.15、2012年6月、8-11頁を参照のこと。
- <sup>3</sup> 福岡伸一『動的平衡—生命はなぜそこに宿るのか』木楽舎、2009年。
- <sup>4</sup> 同上、249頁。
- <sup>5</sup> 生命と環境を連続的に捉える視点は、清水哲郎「展望 世界把握の枠組みとしての〈生命・環境〉」『岩波講座 哲学08 生命／環境の哲学』2009年、1-13頁を参照せよ。なお、食物連鎖の最上位に位置することとなった人間は、他の生命を「食べる」ことは考えるが、自分たちが何者かによって食べられるということを普段は意識しない。だが、人間が天津波に

「飲み込まれる」ような事態が起これば、私たちはやはり自分たち大きな自然の一部に過ぎないことをあらためて自覚させられる。

- <sup>6</sup> 福岡前掲書『動的平衡』、78頁。
- <sup>7</sup> 同上、150頁。
- <sup>8</sup> 福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社、2007年、161頁。
- <sup>9</sup> 同上、164頁
- <sup>10</sup> 同上、167頁
- <sup>11</sup> 鷺田清一『じぶん…この不思議な存在』講談社、1996年。
- <sup>12</sup> 近年、スーパーマーケットのイベントなどで「鮪の解体ショー」が行われることがある。魚に関しては個体の存在が意識されていると言えるかも知れない。
- <sup>13</sup> 福岡前掲書『生命と食』118頁。
- <sup>14</sup> 福岡前掲書『動的平衡』181頁。
- <sup>15</sup> 他者を「モノ」化することの問題は、移植医療においても見られる。拙稿「近代医療の「収奪」性と「環流」性 移植医療の哲学と倫理についての予備的考察」『比較文明』第26号、229-245頁。
- <sup>16</sup> 鷺田清一編著『〈食〉は病んでいるか 揺らぐ生存の条件』ウェッジ選書、2003年、57頁。
- <sup>17</sup> BSE問題により導入されたトレーサビリティは、個体識別を可能にしたという意味では、「個性」を取り戻す試みであると言えなくもない。ただし、個体を数値によって識別するという意味では、囚人における囚人番号同様、管理の手段に過ぎない。放射能汚染の問題によって殺される牛に関する報道がなされたが、その中には牛たちを「家族」と表現する牧畜業者の姿があったが、それは牛たちに本来の意味での「個性」を見出すことと言えるだろう。
- <sup>18</sup> この視点は言うまでもなく、廣松渉によるものである。例えば『もの・こと・ことば』勁草書房、1997年を参照。本稿では、この廣松の視点を十分に咀嚼した上で、それを食の哲学に応用するという作業にまで踏み込むことは出来なかった。今後の課題としたい。